TOPiC

神戸山手女子中学校･高等学校の新しい挑戦

教員の自律的参画による授業改善と アダプティブ･ラーニング

ーカリキュラム･マネジメントの実践ー

神戸山手女子中学校高等学校　校長　平井正朗

教師にとって授業力向上は、永遠のテーマである。2020年の法人合併を機に、新たなスタートをきった濱名山手学院は、さらなる発展に向けて、教育ミッション・建学の精神に照らした様々な実践を進めている。中高は生徒募集に苦戦を強いられ、再建に向けて待ったなしの状態である。不易流行を見極め、名門女子校の「再生」が大命題であることは言うまでもない。

合併初年度は、オンライン授業をはじめとした新型コロナ対応に終始。危難への対策はみな、同じである。学院は、筆者が着任した2021年を実質的な改革初年度と位置づけている。そこで「授業がすべて」をキーワードにカリキュラム・マネジメントを本格化。要約すると、コース・コンセプトの具体化と「地域に開かれた学校づくり」に向けて、学年・教科・分掌の重点課題やシラバスの“見える化”、毎時間の「学習の目標」明記、研究授業・定期考査分析会・模試分析会・授業満足度調査などの定期的な実施を組み込み、学校評価に“ひもづけ”することで、PDCAサイクルに根ざした“成長戦略”に資するようにしている。

どの学校でも、日々、教師は創意工夫を凝らし、バリエーションに富んだ取り組みが展開されている。学校を預かる者としてのポリシーは、「教師の挑戦はすべて学校の財産！それを有機的に結び付けた地域に愛される開かれた学校づくり」である。

人気校のバロメーターは「学校力」につきる。かつて「学級王国」という言葉があり、前年踏襲、相互不干渉、先送り体質、校務固定など、「個別最適」がもたらす弊害が指摘されて久しいが、グローバル化、DX化が進む今、教師個々の努力を“眠らせる”のではもったいない。今こそ、協働的職場風土を構築し、「全体最適」へのカリキュラム・マネジメントが不可欠なのである。

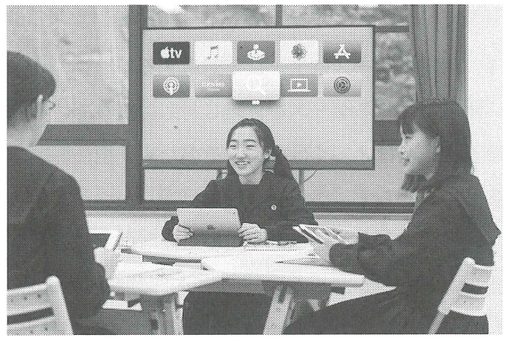
本校では、個別能力への依存や第三者の指摘がない自己研修からの脱却を図り、多忙な教職員の「働き方改革」も勘案して、OJT（On The Job Trainingの略語で、実務を通じて業務をマスターしていただく方法）を通した授業力と生徒満足度の向上に資する独自の取り組みを開発・導入することにした。

教員は各自で授業のビデオ撮りを行い、定期考査分析表と授業録画をチェック、リフレクションを行い、教科主任は検証結果をまとめて職員会議で発表。効果が上がった取り組みは箇条書きし、学校全体で共有できる資料にしている。興味のある事例があれば、校内にいる“お手本”から直接、助言をいただける。新任や入職年数の浅い教師にとっては、指導上の“つまづき”解消の一助に、また、全教職員にとっては新学習指導要領が求める教科横断的アプローチによる探究学習の一助にするなど、活用方法はいろいろあるが、“多忙”な教師が校内でスキル・アップを図る好個の仕組みとなっている。持続可能な取り組みになるようにバックアップしていきたい。

学習指導要領の改訂、大学入試改革、英語教育改革、探究教育、プログラミング教育、高大接続など、目まぐるしいまでの環境変化の中、EdTech（エドテック：Education ＋ Technologyの造語）がイノベーションを起こすトレンドとして注目を集めている。経済産業省は、人間がAIと共存していく社会で必要となる能力をチェンジ・メーカー（未来を創る当事者）と定義し、アダプティブ・ラーニング（個別最適化学習）、STEAM教育等を標榜、社会課題の解決をテーマ化し、学びのシステムの環境づくりとして「未来の教室」を推奨している。今、学校現場に必要なのは、生徒一人ひとりの主体的な学びをどう構築するかという「学び方改革」、また、それを達成するためにどのようなカリキュラムを組んで指導するかという「教え方改革」、そして、その成果を個別のみならず全体でどう評価するかという「カリキュラム・マネジメント」なのである。

建学の精神の一つである「自学自習」には、学校は自らが学ぶ場であり、生徒が進んで学ぶ態度を養うところという当時の校長の思いが込められているとのこと。これはDX化、グローバル化の進展に伴い、新学習指導要領における「学ぶことに興味や関心を持ち、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」ことに直結する。また、生徒個々の誤答分析や学習履歴を蓄積することで、到達度に応じたオーダーメイドの学習内容を提供する多様な学びのシステムを通じたアダプティブ・ラーニング（個別最適化学習）のコンセプトとも一致する。

本校でも学習者自律（Learner Autonomy）に向けて、教育プログラムを単にデジタル化した「知識学習」とするだけでなく、学習進捗状況を一元管理し、「経験学習」ができるLMS (Learning Management System) のシステム構築をめざしている。LMSは、インターネット上で教材を配信したり、学習履歴を管理するためのプラットフォーム。内容的には、ログインして学習する受講機能と教員や管理者が管理・運営を行う管理機能から成り立っている。各教科の背景知識を強化する従来の指導に加えて、課題発見・解決への探究・プロジェクト型学習（PBL）を融合した多様な学び実現へのステップである。



神戸山手女子のモットーは自学自習だ

日本の教員は、欧米のteacherとは異なり、教科指導に加えて、生徒の心に寄り添うカウンセリング・マインド、同僚と協働するマネジメント・マインド、保護者との対話をより生産的に導くコンフリクト・マネジメント、危機管理に関するリスク・マネジメント、さらにはキャリア教育、人権教育、特別支援教育、ICT教育、環境教育といったアプローチができる力量が求められている。生徒にとって必要なことは何でもやらなければならないのである。教師の仕事はハードであるが、子供の成長をお手伝いできる“やりがい”のある仕事である。本校では、効率よい「働き方」の構築に向けて知恵を絞り、産学連携による「学びの選択」を導入することによって、アダプティブ・ラーニングに直結させたいと思っている。